

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 14 日現在

機関番号：15401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23710299

研究課題名(和文) 中国の辺境統治をめぐる「持続可能な発展」と資源管理の現地主導性開拓に関する研究

研究課題名(英文) A Study on the "Sustainable Development Policy" and Expansion of "Indigenous Initiative" for Local Resource Management in Relation to the Frontier Governance in China.

研究代表者

別所 裕介 (Bessho, Yusuke)

広島大学・国際協力研究科・助教

研究者番号：40585650

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円、(間接経費) 870,000円

研究成果の概要(和文)：チベット高原の環境保全と自然資源管理において不可欠な「被開発地域の人々の参与」を問題関心として、従来現地アクターとしては看過されてきたチベット仏教僧院組織とその関連団体が果たしうる役割を総合的に検討した。チベット高原の環境管理に外から関わる公的機関が近代的環境知を土台としているのに対して、牧畜地域の民間の環境団体は、「仏教を通じた環境認識」という自らの価値判断をもっており、それによって外部組織との様々な交渉に接続していることが明らかとなった。このことは、共産党と宗教勢力が相容れない関係にあると見る従来の研究に対し、双方が協働しうる事例を環境・資源問題から提起したものとしてひとつの画期を成す。

研究成果の概要(英文)：This study examined comprehensively the role of Tibetan Buddhists' monastic organization in the scheme of environment protection on Tibetan High Plateau. Formerly, Monastic organization was regarded as useless factor for cooperating with political section, but this study focuses on their potential ability for resolving the grass-root level of environmental problem in their community. While the official institutions are using scientific environmental knowledge, the civil sector of environmental activity in the pastoral region has their own way of evaluation according to "the environment recognition through the Buddhistic perception". And this way of evaluation has become a base articulated to the various negotiations with the external official institution. This example raised the collaboratable case for both of the Communist Party and religious groups, although this two different sectors are regarded as a conflicting relation in the previous study.

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究

キーワード：チベット高原 牧畜民 中国の辺境統治 持続可能性 資源管理

1. 研究開始当初の背景

今日、中国政府は、改革開放以降の数十年間で明らかになった西部辺境地区の環境被害の深刻さから、辺境統治と資源開発のバランスを自身のレジームの根幹にかかわる問題と位置付け、中央部と辺境部との格差是正に向けた民族観光事業や生態保全事業の育成に力を注いでいる。だがその基調はあくまでも国家の主流をなす漢民族の側に視点を置いた辺境統治の合理化論であり、「持続可能な発展」を構想するうえで不可欠な、被開発地域の人々をいかにして資源管理の能動的主体として組み込むか、という重要な問題は看過されている。

チベット高原をめぐるのは従来から欧米の親チベットの国際世論が監視を続けており、ASEAN など流域諸国からの水資源管理に対する風当たりも強い。また現状では、地方行政に携わる民族エリートと産業資本の複合による開発独占が、地域の政治・経済における辺境諸民族の主体的な地位を奪い、資本投下に見合った波及効果を生み出せないばかりか、伝統的価値観への無思慮に根差した民族衝突などの紛争を生み出す契機となっている。

以上のような経過をふまえ、チベット高原特有の生態環境が持つ資源性に立脚した政策提案には、観光経済の底上げの点でも、チベットの領土主権をめぐる民族問題への対処の点でも、より健全で真に持続可能な運営に向けて必須となる当該地域住民の主体的参加を促し、被開発地域における資源管理の現地主導性を開拓するフレームワークの確立が急務となる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、環境保全をめぐる政治・経済・社会にわたる複合的諸課題に直面しているチベット高原の「持続可能な発展」を構想するうえで不可欠な、被開発地域の

人々をいかにして環境保全の能動的主体として組み込むか、という問題において、従来現地主導のアクターとしては看過されてきたチベット仏教僧院とその関連組織が果たしうる役割について総合的に検討することにある。

具体的には、アジア中央部の環境保全をめぐる重要な位置づけにある黄河源流域の牧畜村を対象として、当該村の家畜経営、およびこれに関わって環境荒廃に対処可能な地域共同体の再構成を進める在地の宗教教団の活動に密着し、辺境統治と文化政治が一体となって織りなされる中国の資源管理レジームの内側に、真に持続可能な互惠関係を打ち立てる上で必要なフレームワークのあり方を考究する。

3. 研究の方法

本研究は大きく、() 現地での参与観察資料の収集、() 統計資料および歴史文献による観察データの跡付け、() 成果のまとめと公表、という3つのプロセスで進められる。

() にあたっては、申請者がかつてピジターとして在籍した中国甘粛省の西北民族大学(2005年~2006年)との信頼関係に基づく支援を活用し、現地と事前に十分な折衝を行うことで、外国人の住み込み調査が引き起こすインパクトを最小限にとどめる。() についても、同大学は黄河源流域の環境荒廃と歴史研究に先駆的業績を有しており、文献研究に最適のサポートが期待できる。() にあたっては、同大学の現地研究者と研究会合の機会を持ち、客観的な意見を吸収することで、より包括的な視点を組み込んだ成果の集約を進める。

4. 研究成果

本研究では、環境保全をめぐる政治・経済・社会にわたる複合的諸課題に直面しているチベット高原の「持続可能な発展」を構想する上で不可欠な「被開発地域の人々の参

与」を問題関心として、従来現地アクターとしては看過されてきたチベット仏教僧院組織とその関連団体が果たしうる役割を総合的に検討した。

各年度ではそれぞれ、1年目：牧畜経営の実態とコミュニティ構成原理の特性、2年目：環境荒廃に対処可能な地域共同体の再構成、3年目：僧院付属団体とそれ以外の外的エージェントとの関係、を順次調査した。

初年度は、調査地となる青海省ゴロク・チベット族自治州ガツデ県のG郷における夏季(8月)と冬季(2月)の2回の現地調査において牧畜経営の実態とコミュニティの構成原理の特性を調査し、牧畜経営の実態とコミュニティ構成原理について、「ルコル」と呼ばれる世帯構造を基幹とする相互扶助的な女性の家事労働と男性の畜群管理に焦点を当てつつ、草原環境の長期保全を可能にしてきた伝統的民俗知と協働体系に関する現地調査資料を収集した。

2年目は、前年の研究成果をふまえ、ルコルを基幹とした現地主導の環境保全と資源管理の実践について、人為的な要因、気候変動による要因の二点に分け、G郷生態保全委員会が自主的に講じている具体的な対策を調査した。その結果、冬虫夏草の採取過剰による草地の後退、害虫によるヤクの死亡、害獣の増加による土壌劣化、などの生活環境問題に関して、委員会が独自に考案しているルコル単位の生産調整と、仏教的な「不殺生」や民俗的な「精霊信仰」の規範を内側に組み込んだ文化的なルール作りが実際の草の根の環境保全運動の実践において良好に機能していることを確認した。また現地では、ルコルを基幹としたリーダーシップに基づく村落会議の場に参与し、コミュニティ原理の動員に付随して起こるローカルな資源管理主体としての意識形成について聞き取りを行った。

そして最終年度には、これまでの調査結

果を総括するため、僧院組織の活動と民間組織の活動を統合的に照らし合わせる作業を進めた。現地調査では、当該村の牧畜民有志によって立ち上げられた環境団体である「コルユグ・ツォクパ」の活動実践を中心に、実際のコミュニティ・レベルの環境保全活動への参与とメンバーへの聴き取りを行い、彼らの環境知識と地域の主導的僧院との関係をまとめた。続いて、中央政府による辺境開発の出先機関である環境保全局、および内地の富裕層に支えられた国内NGOがこの地域で展開する環境保全活動の実態についても調査を行い、特にこれらの機関が当該村の草の根環境団体に及ぼす財政的・政治的影響を、マイナスとプラスの二側面から検討した。

以上の研究進捗により、公的機関やNGOなど、環境保護に関連する外部組織が近代的環境管理の知識を活動の土台としているのに対して、牧畜社会側のミクロな環境団体は「仏教を通じた環境認識」という自らの価値判断を基礎として、外部組織との様々な交渉に接続していることが明らかとなった。

以上三か年にわたる調査・研究の進展から、中央主導の辺境統治と資源開発の全体文脈において、在地の牧畜民が自らのローカルな環境知識を元に立ち上げる、生活圏内のミクロな環境・資源問題の解決に向けた行動論理が、国家規模の環境主義体制の構築と矛盾しないものであることが明らかとなった。このことは、従来中国の国家政策と辺境部の宗教文化とが相容れない関係にある、と捉えてきた固定的な見方に対し、双方が協働しうる事例を環境・資源問題から提起したものとして画期的な意義を持っている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 10件)

別所裕介、「『生態移民になる』ということ
三江源生態移民における移住後の生計

戦略とポスト定住化社会をめぐる』、『アジア社会文化研究』、査読有、第 15 号、2014、pp. 65-93。

Bessho Yusuke, "Competition for the Mountain Landscape: the Ritual Territories of Feng Shui and the Yul Lha Cult in the East Frontier Region of Amdo.", In Tsuguhito Takeuchi et al (eds.), *Current Issues and Progress in Tibetan Studies: Proceedings of the Third International Seminar of Young Tibetologists*、査読有、vol. 51、2014、pp. 27-51。

別所裕介、「宗教弘通のアマルガム 華人社会におけるチベット仏教の新展開」、『宗教研究』、査読無、第 379 号 (87 巻 4 輯)、2014、pp. 475-6。

別所裕介、「アヒンサーをめぐるストラグル 現代チベット仏教の社会参加をめぐる可能性と課題」、『宗教と社会』、査読有、第 19 号(学会 20 周年記念号)、2013、pp.4-5。

別所裕介、「聖山阿尼瑪卿与格萨尔 浅析現代草原上的“文化表象”及其意义」、『格萨尔文化研究』、査読有、Vol.1、2013、pp.26-30。

別所裕介、「パツファ・ゾーンのチベット仏教—リメ運動の展開に焦点を当てて」、『宗教研究』、査読無、第 375 号(86 巻 4 輯)、2013、pp.432-4。

別所裕介、「『アヒンサー』をめぐるストラグル—ダイラマの“非暴力主義”における挑戦と課題』、HiPeC Discussion Paper Series、査読無、Vol.21、2013、24pages。

Bessho Yusuke, "Territory Conflict and Peace: Wisdom to Associate with Neighbors, from the Tibetan's view.", HiPeC News Letter、査読無、Vol.6、2012、p.1。

別所裕介、「『アヒンサー』の実践をめぐる

チベット仏教僧と漢民族信徒の関係』、『宗教研究』、査読無、第 371 号(85 巻 4 輯)、2012、pp.342-3。

別所裕介、「ネパールにおけるリメ系チベット仏教僧院の活動展開に関する報告—「パツファ・ゾーン」としてのヒマラヤ仏教圏という視点から』、HiPeC Discussion Paper Series、査読無、Vol.14、2012、40pages。

[学会発表](計 4 件)

Bessho Yusuke, "A Choice of 'Becoming an Ecological Migrant: The Living Strategy of the Pastoral People in Golok which Aim at Compatibility of a City Life and a Village Life.", The 13th Seminar of the International Association for Tibetan Studies, 27th Jul 2013, The National University of Mongolia, Mongol.

Bessho Yusuke, "A Competed Landscape of Mountain: the Ritual Territory of 'feng shui' and 'yul lha' Cult in the East Frontier Region of Amdo", The 3rd International Seminar of Young Tibetologist, 4 Sep 2012, Kobe City University of Foreign Studies, Kobe.

別所裕介、「持続可能性の存在論 黄河源流域の民間環境保全組織『コルユグ・ツोकパ』を事例として」、『第 47 回日本文化人類学会大会、2013 年 6 月 9 日、慶応大学三田校舎。

別所裕介、「環境管理をめぐる中国の辺境統治と文化的主体性—チベット地域での開発プロジェクトを事例に」、『第 45 回日本文化人類学会大会、2011 年 6 月 11 日、法政大学市ヶ谷キャンパス。

[図書](計 3 件)

別所裕介、名古屋大学文学研究科比較人文文学研究室、「チベット高原における『生態牧畜業建設』とコミュニティ・レベルの生

活環境主義 黄河源流域の牧畜社会を事例として』、『ユーラシア乾燥地における遊牧民の定住化と社会主義』(アフロユーラシア内陸乾燥地文明研究叢書) 楊海英編著、2014、pp. 161-188。

別所裕介、デザインエッグ社、『ヒマラヤの越境者たち 南アジアの亡命チベット人社会』、2013、164pages。

別所裕介、弘文堂、「チベットの聖山巡礼 仏教伝統と変容する巡礼空間」『聖地巡礼ツーリズム』、星野英紀・山中弘・岡本亮輔編著、2012、pp.36-41。

〔その他〕

・アウトリーチ活動情報

(現地の研究協力機関である西北民族大学の大学院生に対して本研究内容に基づく講演を行った)「生态环境与民俗—“社区共管”与可持续发展模式」、2012年11月28日、西北民族大学邀请国外专家短期讲学项目、西北民族大学综合楼：格萨尔研究院展厅。

6 . 研究組織

(1)研究代表者

別所裕介(BESSHO Yusuke)

広島大学・大学院国際協力研究科・助教

研究者番号：40585650